

第 12 回 AUE アカデミックカフェ (2017 年 2 月 20 日)

〈改造された自然〉を育て、楽しむ～金魚・菊・朝顔から見た都市の文化～

野地恒有 (地域社会システム講座)

〈改造された自然〉とは、天然のままでは存在せず、成長段階で手を加えて変形させることで作り出された自然物のことを指している。たとえば、金魚、盆栽、菊などがそれである。私は、江戸時代に生まれた観賞用動植物の飼育栽培の世界における〈改造された自然〉について民俗学的に研究している。この試みは、新しい伝承的な世界の発見という現代民俗学の課題として位置づけられる。

金魚は、硬骨魚綱コイ目コイ科フナ属のアジブナから交雑や突然変異により生まれた品種の総称である。日本の金魚は 16 世紀の初めに中国から輸入された。現在、日本の金魚の品種には、ワキン、リュウキンなど約 30 種類があり、中国の金魚の品種は約 300 種類である。日本と中国では品種の分類や命名の方法が異なっている。命名法について見ると、中国金魚の品種は、鱗、尾、頭、眼球などの形状や色の組み合わせにより命名されている。たとえば、中国の「龍睛」という品種は日本のデメキンに相当するが、その中で体色が黒で尾鱗が蝶のように跳ね上がっている形をしたものが「墨龍睛蝶尾」、頭に肉瘤があるものが「墨龍高頭」という品種になる。中国金魚には、品種全体を貫く一定の命名法がある。それに対して、日本金魚には品種全体に共通する命名のルールはない。たとえば、デメキンは眼球の形状から命名されているが、頭部に肉瘤があるランチュウやアズマニシキなどという品種は、その形状から命名はなされていない。トサキン (土佐金) やツガルニシキ (津軽錦) などは地域と結びついて命名がなされている。日本金魚の命名は品種ごとに個別的になされており、一貫性がない。

熱心な愛好家として金魚を飼育し観賞する人たちを見てみよう。日本の場合、愛好家の集団は品種を単位として組織され、その中で品評会がおこなわれる。品種ごとに選評基準が作られ、その基準があるべき理想形として提示されている。たとえば、名古屋市を中心に飼育されてきたジキンという品種 (愛知県天然記念物) の場合、図 1 のように、5 箇所 (鱗と口元のところの色が赤で、胴体の色が白であるものが理想体とされ、これは六鱗 (ろくりん) と呼ばれる。 (最近では、鰓ぶたのところの赤も「頬紅」といわれて認められている。)) この理想体に限りなく嵌め合わせようとする飼育・改造技術が指摘できる。また、高知市を中心に飼育されてきたトサキンという品種 (高知県天然記念物) の場合、図 2 のように抽象化されたトサキンの形が理想形とされ、飼育プロセスにおいて、この理想形に限りなく嵌め合わせようとする飼育・改造技術が指摘できる。

それに対して、中国の品評会は品種別にはおこなわれず、その選評基準は、日本のように 1 品種の中で完結していない。中国の選評基準は、金魚全体を包括して設定されており、実態に即して具体的に作成されている。たとえば、肉瘤をもった品種の金魚全体に対して、肉瘤が大きく苺の形をしていれば 40 点、小さければ 15 点というように設定されている。さらに特徴的なのは、従来には見られない新しい品種の金魚を作り出すことが高く評価される点である。

日本金魚と中国金魚の選評基準とその観賞は表 1 のように対比される。日本金魚の選評基準は、1 品種に完結した理想形の提示であり、その基準への嵌め合わせという飼育形態

がみられた。そして、その観賞の志向は、一定の理想形（定形）への深化である。中国金魚の選評基準は多品種を包括した実体に即した等級分類の提示であり、その基準外の品種作出という飼育形態がみられた。そして、その観賞の志向は、異形への拡大である。〈改造された自然〉と人間の関係から、日本では定形へ深化し、中国では異形へ拡大するとまとめられる。身近な金魚という題材は、日本と中国における自然観の比較文化論として展開できる可能性を持っている。

表1 日本金魚と中国金魚の対比

	選評基準	飼育形態	観賞の志向
日本金魚	1品種に完結した 抽象化された理想形	基準への嵌合	定形への深化
中国金魚	多品種を包括した 実体に即した等級分類	基準外の創出	異形への拡大

日本金魚の場合、人間の意に沿ってコントロールし得た自然、言い換えれば、人間の意に「随順化」した自然を作り出すところに、飼育や観賞の喜びや刺激があるといえる。

日本における一定の理想形（定形）への深化と「随順化」した自然の観賞という特徴は金魚飼育だけではなく、観賞用の菊や名古屋朝顔と呼ばれる朝顔（写真1）の栽培でも指摘できる。また、菊人形（写真2）も観賞用動植物の飼育栽培文化から見ると〈改造された自然〉の一つと位置づけられ、そこにも、一定の理想形（歌舞伎の演目や歴史の一場面をあらわす型）へ根付きの生菊を嵌め合わせるという特徴が見出される。菊人形も「随順化」した自然を体現しているといえる。

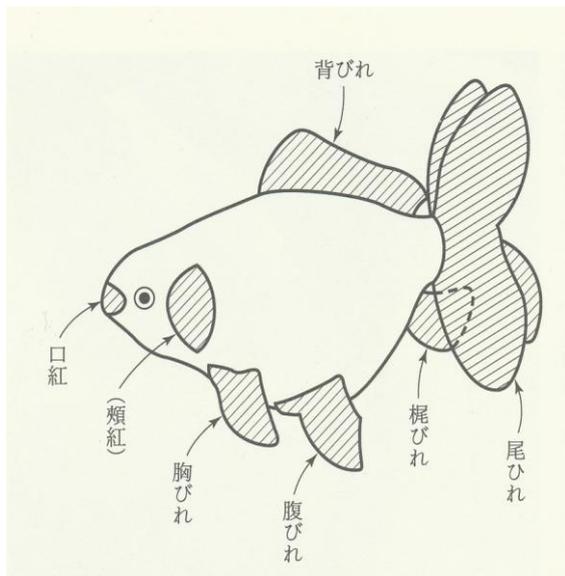


図1 ジキンの理想形（体色）

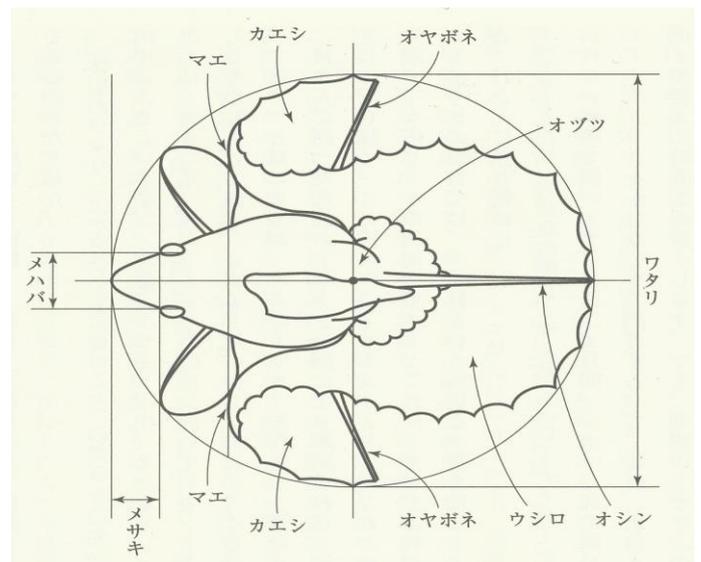


図2 トサキンの理想形



写真1 名古屋朝顔



写真2 菊人形の骨組みと生菊